

# ハゲタカ出版社から学んだこと

ジェフリー・ビール

*Jeffrey Beall. What I learned from predatory publishers*

<https://dx.doi.org/10.11613/BM.2017.029>

日本語訳：京都大学附属図書館<sup>1</sup>

## 抄録

本稿は、2012年から2017年までハゲタカ出版社を特定しリストアップしてきた筆者自身の体験談です。ハゲタカ出版社は、ゴールド（著者支払い）オープンアクセスモデルを使用して、できるだけ多くの収入を生み出すことを目指しています。この論文では、ハゲタカ出版社がどのように出現したかを解説し、それらがどのように大きく成長し、オープンアクセス運動、学術出版業界、および学術図書館員に黙認されてきたかを示します。著者は、リストからの削除を求めるハゲタカ出版社の戦術、ハゲタカジャーナルが科学に及ぼすダメージの詳細、および学術出版の将来についてコメントします。

キーワード：学術出版、オープンアクセス、ジャーナル、ハゲタカ出版社、研究

## はじめに

2012年1月、筆者は Scholarly Open Access という新しいブログを立ち上げ、ハゲタカ出版社とそのジャーナルをリストアップし、オープンアクセス学術出版について批評的なコメントを記載しました。2017年1月、雇用主であるコロラド大学デンバー校からの強いプレッシャーに直面し、失職を恐れてブログを閉鎖し、全てのコンテンツをブログプラットフォームから削除しました。ブログを書いて公開した5年間で、筆者は素晴らしい学習体験をしました。世界中の数百人の優秀な学者や学術出版業界の幹部と会って対応しました。学術出版について、予期していなかったほど学びました。また、論文発表を求められる研究者のプレッシャー、研究評価、そして査読について学びました。

## ハゲタカ出版登場の舞台準備

インターネットが学術出版に役割を果たすようになる前、つまり1998年頃にワールドワイドウェブが普及した以前は、ほとんどすべての学術雑誌が印刷ベースの購読ジャーナルでした。当時、ほとんどのジャーナルは一般的に尊敬され、質が高く、査読は真剣に受け止められ、適切に管理されていました。低品質の学術出版社はいくつか存在しましたが、一般

---

<sup>1</sup>本論文の原文は CC BY-NC-ND であり、日本語への翻訳及び公開についてはジェフリー・ビール氏から別途許諾を得ている。

的に、研究者はそれらを認識しており、それらを避けることを知っていました。

1980年代と1990年代には、北米の多くの学術図書館が定期購読のキャンセルプロジェクトを実施しました。購読価格が上昇し、図書館の予算が減少したため、彼らはジャーナルをキャンセルするよう圧力をかけられました。北米でのサブスクリプション価格は、いくつかの理由で上昇しました。第一に、団塊の世代が多くの人々が博士号を取得してテニユアトラックに入る時代に達したため、ジャーナルは、団塊世代の人々が実施していた研究の増加に対応するために、より多くの記事を発表し始めました。場合によっては、年2回のジャーナルが四半期ごとになり、四半期ごとが月刊になりました。これらはすべて、出版のために提出される研究論文の数の増加に対応するためです。当然、より多くの出版物はより多くのコストがかかり、特に1990年代初頭の印刷環境にあってはそれが如実でした。逐次刊行物の値上げの原因のいくつかについての現代的な議論は、Farrell (1) によって提供されています。

北米の学術図書館の購読料の高騰につながった他の2つの要因がありました。1つは、1990年代後半のアメリカとカナダのドル安、そして、多くの比較的大規模な学術図書館で収集する雑誌が、当時通貨の強かった欧州の学術雑誌のものであったことでした。もう1つは、ベビーブーム世代が高等教育の教員職に就くことと並行する現象である新しい研究分野の創設でした。ナノマテリアルやゲノミクスなどの新しい分野が生まれ、多くの新しいジャーナルが生まれました。

残念ながら、ジャーナルの価格上昇のこれらすべての理由を理解している人はほとんどいません。ほとんどの人は、出版社に対して、雑誌の価格上昇だけを取り上げて近視眼的に非難するという政治的には正しい知的ショートカットを採用し、真の原因を無視しました。

## オープンアクセス運動家

1990年代半ばのウェブの出現と相まって、この見当違いの非難がオープンアクセス運動として引き継がれ、それは迅速かつ巧妙に本格的な社会運動に変わりました。

社会運動が成功するには、敵が成長し、繁栄し、メディアの注目を集める必要があります。法定最低賃金引上げ論者は、アメリカのレストランチェーンであるマクドナルドを敵に仕立て上げました。遺伝子組み換え作物の反対陣営はモンサント社を敵にしました。オープンアクセスの支持者たちはこの戦術をコピーし、出版社のエルゼビアを敵として選択しました。

間もなく、エルゼビアへの攻撃が高まりました。多くの人々が、この仕立て上げられた敵を倒すヒーローになることを夢見ていました。それは、オープンアクセスヒーローの神殿に自分の名を刻み込む偉業となるはずのものでした。出版社である **Public Library of Science** は、2000年代初頭に **Elsevier** と競合して時代遅れにするために立ち上げました（このミッションでは失敗しました）。多数のオンライン請願書が流布し、署名した研究者の比率は小さかったものの、エルゼビアに反対することのほぼ満場一致の論調で喧伝されました。ソー

シャルメディアでは、オープンアクセスの擁護者による美德のシグナル伝達の増加が見られ、多くのキャリア研究者や学術図書館員が Twitter、Facebook、メーリングリスト、ブログを使用してオープンアクセスを称賛し、「貪欲な」出版社を非難しました。彼らは、正義の側としてのオープンアクセス運動の一員であるということをひけらかしたかったのです。

いくつかの著名なオープンアクセス声明が、ヒーロー志望のエリートたちが自薦で集まった委員会によって起草されました。それは購読ジャーナルに発表した論文に基づいてすでにキャリアを安全に構築しおえた人々でした。オープンアクセスリポジトリが形成され、高額なソフトウェアライセンスコスト、それらを管理するための専門スタッフおよびサポートスタッフの配置、およびその他の追加コストで大学図書館に多額の費用がかかりました。しかし、多くの教員は図書館が運営するそうしたリポジトリを無視しました。品質の確かな購読ジャーナルで出版しつつかつその論文、または同等品をリポジトリでオープンアクセスにすることもできるという二重の利点を享受できるというのに。これでもグリーンオープンアクセスというのは、その提唱者らが主張していたような優れた発明と言えるのでしょうか？

オープンアクセスリポジトリへの貢献に対する研究者のほぼ完全な関心の欠如に対処するために、オープンアクセス信奉者は同僚に義務を課すことを考え出し、義務化はオープンアクセスの擁護者によって祝福されました。オープンアクセス運動に関するメーリングリストに寄せられる感情的な投稿は、まるで新たな戦果を告げる大本営発表のような色合いを帯びていました。

## ハゲタカジャーナル

そして、自分の利益のためだけに著者支払いモデルを使用するハゲタカジャーナルが登場し始めました (2)。2008年と2009年に初めて気づいたのは、これまでに聞いたことのない、広範囲に及ぶ新着の図書館学ジャーナルへの投稿を求めるスパムメールを受け取ったときです。筆者はそれらを受け取るたびに印刷するようにしました。そして学術図書館員の性として、筆者はこの新しい情報を整理して共有したいと思いました。ハゲタカ出版社の最初のリストを、ブログサービスの Posterous で公開しました (3)。リストは非公式であり、いくつかのエントリしかありませんでした。どちらとも決めかねるケースのために、しばらくの間、「ウォッチリスト」と名付けた 2 番目のリストがありましたが、リストを使用している人には、ある出版社がウォッチリストに採録されることはメインリストへの採録と本質的に同然であることがすぐにわかりました。

筆者がハゲタカ出版社から学んだことは、彼らはお金を職業倫理、研究倫理、出版倫理よりもはるかに重要視し、学術出版のこれら 3 つの柱は利益のために容易に犠牲にされるということです。ハゲタカ出版社とそのジャーナルは、登場するとすぐに、簡単に出版したい著者と、わずかな先行投資で簡単にお金を稼ぎたい大ざっぱな起業家の両方にとって天の恵みとなりました。

ハゲタカ出版の出現以来、何万人もの研究者が、修士号と博士号を取得し、学位、その他の資格と認証を授与され、雇用と昇進を受け取り、職に就いたものと思われます。金さえ払えば載せてくれるジャーナルの軽薄なアクセプト体制がなければ、到底達成することができなかつたはずの成功を手に行っているのです。

もちろん、これは高等教育機関とその経営層が学術論文を学術的成果の尺度として使用していることを言っています。アカデミーと業界の両方がハゲタカジャーナルを理解し、研究コミュニケーションをどれほどひどく汚しているかを察知するのに時間がかかりました。投稿された原稿をほぼ自動的に受け入れるハゲタカジャーナルが誕生するはるか前に起草された評価基準を多くのテニユア委員会その他の学術委員会が採用していたからです。非常に多くの人々がハゲタカジャーナルを学術的評価のために簡単に使用することにしてしまったもう 1 つの理由は、出版物のリストをちゃんと吟味するには時間と労力がかかりすぎることです。

つまり、研究経歴書上の発表論文のリストを見て、すべての出版物が正当であると無批判に想定することはできなくなりました。学術成果または就職のために提出する発表論文のリストは、注意深く精査する必要があります。ハゲタカジャーナルはまがいものであり、それらのトリックの 1 つは、合法的なジャーナルのように聞こえる、または読める誌名を使用することです。正当なジャーナルの誌名とハゲタカジャーナルの誌名の違いがわずかに 1 単語でしかないことがよくあります。他のジャーナルの誌名を一字一句そのまま使うハゲタカジャーナルもいくつかあります。

もちろん、すべてのオープンアクセスジャーナルがハゲタカジャーナルであるとは限りません。一部は倫理的に活動し、研究の完全性を維持することを目的としています。それでも、ゴールド（著者支払い）モデルを使用するすべてのオープンアクセスジャーナルは、利益相反に直面しています。彼らが受け入れ、発行する論文が多いほど、彼らはより多くのお金を稼ぎます。つまり、価値のない原稿を受け入れて必要な収入を得ようとする誘惑が続いています。

## 私たちの出版社をリストから外せ

5 年間にわたって、筆者は自分のブログとそのリストを公開していました。出版社と独立系ジャーナルは、リストから抜け出すためのさまざまな手段を常に試しました。時間の経過とともに、ジャーナルや出版社を削除する要求が増え、大学がリストを推奨したり、それらを公式のブラックリストとして使用したりするようになりました。また、出版社が使用した方法はより厳しくなりました。

ハゲタカ出版業の経営者は筆者に電子メールを送って、自分たちのジャーナルの美德を称賛し、査読の厳格さと、尊敬に値する編集委員らの経歴について説明しました。それらの一部は、筆者が使用して利用可能にした基準文書を使用して自己分析を行いました。例外なく、これらの自己分析では、それら出版社が基準のどれも満たしていないどころか、近づ

いてもいないことが露呈され、リストからの削除には値しないことがわかりました。

他はより積極的な戦略を使用しました。一部のパブリッシャー、特にスタンドアロンのメガジャーナルのパブリッシャーは、筆者の大学の Web サイトと、重要だと思われる大学関係者の名前とメールアドレスを調べます。それから彼らは彼らにメールを送って、筆者を非難し、筆者の仕事、筆者の倫理、そして雑誌や出版社について判断を下す筆者の能力について虚偽の非難をします。出版社は金、競争、強欲に駆り立てられ、収入の増加を妨げる障害の排除に努めています。筆者のリストはそのような障害のひとつでした。

さらに別の人は別の戦略を試みました。何人かは、膨大な電子メールや手紙で大学の職員を苛つかせました。それらの多くは大仰なレターヘッドを持つ PDF の添付ファイルとして送付され、筆者が所属大学の名声をいかに貶めているかを大学に知らせました。彼らは、騷擾を回避するために大学が筆者に圧力をかけることを狙って、学長や他の人にメールを送り続けました。彼らは大学をできるだけ苛つかせようとしていました。当局がメールにうんざりして、メールが止むためだけにでも筆者を黙らせようとするだろうと狙ったのです。出版社の MDPI はこの戦略を使用しました。

ハゲタカ出版社のジャーナルに論文を発表したことのある研究者が、その出版社の度を越えた擁護者になってしまうことにも常に驚かされました。まるで出版社に忠誠心を感じたかのようです。これは、そうしたハゲタカ出版社擁護者の多くは、正当な学術出版社から多くの論文を何度もリジェクトされてきたからだと思います。やっとな自分の論文を受理して出版してくれる出版社を見つけると、彼らは高揚し、出版社を保護し、擁護するために可能な限りのことをしました。特に、筆者のリストへの掲載から出版社を守ります。研究者、特に、尊敬される出版社からのジャーナル、つまり、厳密な査読を実施するジャーナルによって論文をリジェクトされ続けた研究者は、論文を受理して出版してくれた出版社を愛してしまうのです。

## ブラックリストとホワイトリストについて

ジャーナルのホワイトリストとブラックリストの長所と短所についての会話は、常に興味深いものです。5年間にわたってふたつのブラックリストの作成、発行してきた者として、筆者は出版社も大学もブラックリストという考え方を好まないことを請け合えます。このリストは収入の減少を意味するため、出版社はこれを好みません。というのは、研究者がリストに含まれているジャーナルや出版社を避けるからです。特に、多くの人が筆者のリストで行ったように、彼らの大学が、リストされたジャーナルに掲載された論文に評価を与えることを拒否した場合はなおさらです。

筆者が学んだこととして、大学は、ジャーナルのブラックリストが醸し出すネガティブ感が好きではありません。米国の大学は企業化のプロセスをかなり進めており、そうすることで、彼らの広報部門はすべての大学の成果がポジティブであり、新しい顧客や授業料を支払う学生を引き付けることを目的とすることを望んでいます。したがって、大学の教員であり、

ブラックリストを公開している場合、学問の自由は保証されていますが、大学からの反対や嫌がらせに直面する可能性があります。

一方、ホワイトリストの最大の弱点は、おそらく心ならずも、ハゲタカジャーナル、またはリストに載せられた後にハゲタカジャーナルとなったジャーナルが含まれてしまうことが少なくなく、また、不誠実な研究者はえてしてそのようなリストの中から最も受理され易そうなジャーナルを探して投稿先に選ぶ傾向があることです。ホワイトリスト上の最も簡単なジャーナルに公開しても、最も競争的なジャーナルに公開しても同等の評価が得られるのです(4)。このようにして、ホワイトリストは、金さえ払えば載せてくれるハゲタカジャーナルが生まれる温床となってしまっています。JCR (Journal Citation Reports) にせよ、DOAJ (Directory of Open Access Journals) にせよ、Scopus にせよ、ホワイトリストにいったん掲載されてしまえば、あとから大金を稼ぐことができるのです。

ブラックリストとホワイトリストはどちらも、研究科長やプロボストによる研究業績評価を容易にします。このようなリストを用いると、ブラックリスト上のジャーナルへの発表論文には評価が与えられず、ホワイトリスト上のジャーナルへの発表論文には評価が与えられます。研究業績評価は、慎重な評価を欠いた単純な二値になります。

## ハゲタカ出版社と科学への脅威

ハゲタカ出版社は、科学にとって異端審問以降最大の脅威であると思います。彼らは、方法論的に不健全な科学から本物の科学を区別できず、補完代替医療 (CAM) などの疑似科学を本物の科学であるかのようにまかり通らせ、社会運動家の文章を科学として刊行してやってしまうなど、学術研究を脅かしています。

出版社経営に利益をもたらすことを目的としているため、ゴールド (著者支払い) オープンアクセスジャーナルは、ピアレビューに関して強い利益相反を持っています。彼らは常に金を稼ぎたいと考えており、論文を拒否することは収入を拒否することを意味します。この対立は、学術出版の継続的な崩壊の中心にあります。著者こそが学術出版サービスの消費者になってきています。読者でも学術図書館でもありません。企業活動上、生来の性質として、常に顧客のコンテンツを確保したいと考えます。収入の流れを継続させ、大きくするためです。そのため、より簡単に受理されるジャーナルなどの新しいサービスをサービスに加えるのです。

大規模なハゲタカ出版社の多く、特に西ヨーロッパに拠点を置く出版社は、ニッチなビジネスを提供しています。彼らのビジネスは、トップ出版社によってリジェクトされた原稿、つまり、Elsevier、Wiley、Sage、Taylor & Francis、OUP などによってリジェクトされた論文を発行するように設計されています。彼らは、ラストリゾートとして機能し、他の出版社ならば出版しようとは思わない論文の出版機会を提供します。その本質は、学術論文の落ちこぼれサロン (*Salon des Refusés*) です。しかし、現在の市場は偏っており、「ラストリゾート出版社」は本物の出版社よりも多く、それらはすべて劣った原稿を求めて互いに競い合

っています。

疑似科学自体のように、これらの出版社は正当な出版社であるふりをします。一部のオープンアクセス出版社は、イギリスに拠点を置いていないにも関わらず強い英国訛りのスポークスマンを雇い、科学的会議やその他の会議に出席して自身のことを声高に語り、展示ホールにブースを出したり、ときには小規模な会議の共同スポンサーになったりさえします。彼らは出版社協会に参加し、オープンアクセス運動への寄付を披露し、高齢のノーベル賞受賞者をひとりふたり編集委員会に実働なしで入ってもらったりします。

CAM は本当に人気を博しており、著者負担型ジャーナルがその主な原動力となっていますが、いくつかの購読型ジャーナルもこの動きに加担しています。ハゲタカジャーナル、さらには正当な出版社のジャーナルでさえ、この非科学的な医学研究を公衆に対して正当化しています。鍼治療とホメオパシーが盛んであり、その効果の主張を裏付けるために毎年数多くの「研究」が発表されています。医学では、境界設定は失敗しており、正当な医学研究が終わり、健全でない医学研究が始まる明確な境界線はもはやありません (5)。偽の医薬品や栄養補助食品を宣伝する偽の研究を含め、歴史上、これまでになく疑わしい医学研究が発表されています。医学研究は今日の人類にとって最も重要な研究ですが、本物の医学研究と疑似医学研究の明確な区別はもはやありません。いったい、すべての人間の努力の中で、重要性、価値、および普遍的な利益において医学研究こそ何にも増して大切なものではなかったのでしょうか？

## 学術出版業界

かつては誇らしかった学術出版業界は急速に衰退しています。研究者らの一般的な感覚として、学術出版は崩壊しつつあり、バラバラになりつつあります。かつては力強く尊敬されていたのに思いがけず急速に落ちぶれた何かを引き合いに出してこの業界を譬える者もいます。この低下の要因はふたつあります。

それらのひとつは、科学ジャーナルの高品質性を維持するのに十分な収入を生み出さない、ゴールド（著者支払い）オープンアクセス出版の到来です。ほとんどの場合、著者からの支払いで賄われるジャーナルは、基本的には、人々が論文を PDF に変換してインターネット上に置くためにお金を払うリポジトリに過ぎません。唯一の例外は、大量のボランティア精神で成り立っているジャーナル、特定の分野またはさらに細かい分野の学者の緊密なコミュニティのための主要な学術コミュニケーションツールとして機能するジャーナルです。

学術出版業界自身にもその衰退の責任があり、これがもうひとつの要因です。業界は一貫してそれ自体を規律を守ることに失敗しました。それはハゲタカジャーナルが現れ、増殖し、そして繁栄することを許し、見て見ぬふりをしていました。現存するオープンアクセス出版社業界団体の 1 つは、鶏小屋を守るキツネです。学術出版業界には資格認定システムも品質管理もありません。Crossref（デジタルオブジェクト識別子、DOI のサプライヤー）など

の出版サポートビジネスの多くは、追加の収入源としてハゲタカジャーナルを喜んで歓迎しています。ハゲタカ出版社は、科学と査読を道連れに、学術出版業界を崩壊させつつあります。

オープンアクセスのジャーナルが登場する前は、学術出版は、研究者、ジャーナル編集者、出版社、読者の間の暗黙の紳士協定によって統制されていました (6)。その協定とは、研究および出版プロセスのすべてのレベルで高いレベルの整合性を維持することでした。ハゲタカ出版社と共謀した著者が彼ら自身の目的のために学術的なコミュニケーションを破壊したので、この紳士協定は今や放棄されてしまっています。

## 学術出版の未来

最後に、学術出版の未来について考えてみましょう。プレプリントサーバーとオーバーレイジャーナルが役割を果たすであろう未来です。arXiv.orgによって開拓されたプレプリントサーバーは数が増えており、より多くの学術分野にサービスを提供しています。これは持続すると筆者は考えます。高品質の学術誌と比較して、特に査読やコピー編集を行う必要がないため、運用コストが安価です。最小限の審査を行います。それを行うときも通常論文レベルではなく研究者レベルで行います。つまり、科学的コンセンサスから逸脱した論文を提出している研究者をブラックリストに載せるのです。

オープンアクセスジャーナルからプレプリントサーバーへの移行の利点のひとつは、著者の支払いとそれに伴うすべての腐敗がなくなることです。

各フィールドのジャーナルをオーバーレイすると、対応するプレプリントサーバーに毎月または四半期に表示される最良の記事が選択され、それらをリストしてそれらにリンクする目次、折衷的でアドホックな巻号が生み出されます。各オーバーレイジャーナルの編集委員会、その分野の専門家は、方法論的に健全で、斬新で科学的で、分野にとって重要なプレプリントを選択するでしょう。

## まとめ

5年間にわたり、ハゲタカ出版社とジャーナルを追跡してリストアップしました。筆者を最も攻撃したのは他の学術図書館員でした。その攻撃は、時には、筆者の考えや、ハゲタカ出版社についての知見とは無関係な、個人的なものもありました。

オープンアクセス出版モデルの弱点をあえて指摘したため、学術図書館員は常に筆者を攻撃しました。図書館司書というものは、政治的正しさと流行に卑屈に追従するものなので、職業柄オープンアクセスの社会運動と協調し、真実を語る人々を攻撃したのは当然のことです。これらの図書館員の多くは、オープンアクセスを賞賛しながらハゲタカ出版社が仕掛けた罠を警告することには失敗した点において、大学の教員に対して不誠実でした。

したがって、改造と自己変革が必要なのは学術出版業界だけではありません。学術図書館員は、ハゲタカ出版社の問題を認識し、学術コミュニケーションについて援助と助言を求め



る図書館利用者に真摯でなければなりません。

## 潜在的な利益相反

申立事項なし。

## 参考文献

1. Farrell D, editor. Systems and procedures exchange center (SPEC) flyer. In: Serials control and deselection projects. 147th ed. Washington, NW: Association of research libraries, Office of management service, 1988. p. 1-2. [Google Scholar]
2. Beall J. Dangerous predatory publishers threaten medical research. *J Korean Med Sci.* 2016;31:1511–3. 10.3346/jkms.2016.31.10.1511 [PMC free article] [PubMed] [CrossRef] [Google Scholar]
3. Anonymous. Posterous. Available at: <https://en.wikipedia.org/wiki/Posterous>. Accessed February 9th 2017.
4. Moosa IA. A critique of the bucket classification of journals: The ABDC list as an example. *Econ Rec.* 2016;92:448–63. 10.1111/1475-4932.12258 [CrossRef] [Google Scholar]
5. Gieryn TF. Boundary-work and the demarcation of science from non-science: Strains and interests in professional ideologies of scientists. *Am Sociol Rev.* 1983;48:781–95. 10.2307/2095325 [CrossRef] [Google Scholar]
6. Beninger PG, Beall J, Shumway SE. Debasing the currency of science: The growing menace of predatory open access journals. *J Shellfish Res.* 2016;35:1–5. 10.2983/035.035.0101 [CrossRef] [Google Scholar]